



《ジェネラリスト BOOKS》
身体診察 免許皆伝
目的別フィジカルの取り方 伝授します
平島 修, 志水太郎, 和足孝之 編

● A5 頁 248 2017年4月
定価：本体 4,200 円＋税
[ISBN978-4-260-03029-8] 医学書院刊

誰でも健康でいたい、病気にはなりたくない。だから、患者が診察を受けに来たのには何かの理由がある。これが医師と患者とのかかわり方だ。

患者を「診る」ことは、初診時の全身の第一印象をみて、会話し(問診)、ちょっと丁寧な観察(診察)から始まる。なぜ患者が来院したのか、何が起こりつつあるのか、頭が回転し始める。外来、入院、救急などで、患者を観察し、話を聞きながら状況判断し、すぐに対応すべきことなどを検討しながら推論や仮説を設定、対応し、身体診察を行い、次の選択肢や指示を出さなくては行けない。特に時間的制限の高い救急やインテンシブ・ケアでは、診療のプロセスが凝縮されている。これらのプロセスこそが臨床の醍醐味だ。

身体診察は、患者との「直接」の接触の始まりだ。推論や仮説を頭に入れ、練達の医師は無意識のように順序よく、素早くポイントを押さえて身体診察を進め、「あるのか」「ないのか」を意識しながら所見をチェックする。臨床現場での優れた臨床医や指導医、患者との「実体験」は、医学生・研修医時代にとっても大事な、何事にも代えられない学びだ。「座学」でいくら教科書や専門書を読んでも学べない。臨床現場でのアナログな実体験こそが、いくらデジタル時代になっても医師には大事なプロセスなのだ。

検査体制が整い、エコー・CT・MR など画像検査機器の普及もあって、身体所見などの基本的な臨床の「アナログ」手技は極めておろそかになっている。ついデジタルデータ(検査)に頼りがちになるが、これは臨床

現場では本末転倒なのだ。

グローバル世界の中で、日本の医学教育の評価は必ずしも高くない。欧米などの「屋根瓦方式」「他流試合」「交ざる」臨床教育と比べ、「タテ」割りの医局講座制などは日本人の意識と組織構造の弱点である。せつかくの臨床の知的「問題解決」の楽しさを実体験として教えられていない。

臨床研修のマッチングが導入されてから、優れた研修プログラムを提供する病院群が若者をひきつけている。臨床研修病院を「定点的回診」しながら臨床教育にかかわっている数少ない臨床教育の達人たちに聞くと、臨床医としての意欲ある若い医師たちは確実に育っている、と認識している。

平島修先生、志水太郎先生、和足孝之先生編集による『身体診察 免許皆伝』は、臨床での診察の基本を学ぶのに極めて適した良著だ。身体診察の要点を、多くの図を使いながら、具体的にわかりやすく説明している。まずは、この本を手元において患者を「診る」。余裕のあるときにはさらに『ベイツ』¹⁾に目を通して、優しい臨床医の「患者の診かた」に仲間と温蓄を傾けることは、多忙な診療の中にあっても楽しいひと時を共有できるだろう。

- 1)ベイツ診察法。第2版。MEDSi；2015
- 2)サパイラ 身体診察のアートとサイエンス。原著第4版。医学書院；2013